

平成 30 年度 依存症民間団体支援事業報告

団体名 特定非営利活動法人いちごの会

事業名 『依存症の理解と関わり方を学ぶ』地域ネットワークづくり関係者研修会
～回復につながる自助グループ・行政・医療・福祉のネットワークと役割分担～

<活動内容の概要>

入院を中心として組み立てられてきたわが国のアルコール依存症治療ですが、1980年代から大阪ではいち早く、地域医療をめざしたネットワークが始まっていき、地域生活支援へと展開していきました。今では全国的にみても包括的な支援の必要性が関係者の共通認識となってきました。アルコール健康障害対策基本法が施行されるようになり、依存症だけでなく高齢者支援や精神障害者においても地域包括ケアシステムの充実に向けて地域医療・地域生活を中心に組み立て直していく動きがみられるようになってきました。アルコール依存症を巡る状況も変化してきています。様々な依存症についての治療や回復支援についての知識や技術が広く求められるようになってきました。

今後、地域でのネットワークづくりを図っていくには、①地域での自助グループの伸展②行政の相談機能の一層の充実③専門治療機関の整備④地域の福祉援助や教育・司法に関わる広範な人々の問題発見から回復支援につながる緊密な連携づくりが不可欠であり、依存に関わる問題を早い段階からアフターケアまで地域の中で診る⑤専門クリニックや⑥回復をめざし社会生活を実現していく回復施設といった社会資源の創出が求められているのだと考えています。

本事業では、依存症専門医療機関のない兵庫県尼崎地域においては、アルコール依存症理解を高めていくために、住民・関係者等に啓発普及する研修会を開催することに致しました。準備段階から地域の自助グループ・行政・医療機関へ呼びかけ、協力を得ながら本事業に取り組んでいくことができました。熱心な人々が多い地域であり、今後へのより一層の緊密な連携作りへの契機となり、地域に潜むアルコール関連問題の発見と介入への相談がしやすい関係づくりが更に深まっていくこととなりました。また、多種多様な立場の相談支援事業者に広く広報させていただき、様々な形での新たなつながりもできました。

そして、大阪地域では、アルコール依存症の地域ネットワークは医療・行政・断酒会の三位一体の「大阪方式」によって整備が進んできていたもの今日では、アルコール依存症だけでなく、いろいろな依存症とその支援についての正しい情報提供が求められる時代を迎える中、これらのニーズに応えることを目的としたオープン講座を開催することができました。

○尼崎市後援

地域ネットワークづくり「依存症の理解と関わり方を学ぶ」関係者研修会

会 場 : 尼崎市総合文化センター第2会議室(7F)
尼崎市昭和通2丁目7-16

日 時 : 2019年2月1日(金) 13時45分～16時45分
2月8日(金) 18時30分～20時45分
2月15日(金) 13時45分～16時45分
2月22日(金) 18時30分～20時15分

第1日目

「依存症の援助技術を考える」(講演・グループ討議)
講師/佐古恵利子(リカバリハウスいちご 所長)
依存症当事者(断酒会会員、当事者の家族)

第2日目

「専門医に聞く、ここが知りたいアルコール依存症とその治療」(講演・質疑応答)
講師/植松直道(植松クリニック 院長)

第3日目

「アルコール問題のある家庭で起こっていること、地域で私達ができること」(講演・シンポジウム)
講師/上田知香(垂水病院 ソーシャルワーカー)、当事者の家族
シンポジスト/尼崎市職員、当事者家族(断酒会家族会会員)、いちごの会職員

第4日目

「回復へのあゆみ:断酒会の人々と語ろう ～断酒はひとりではできない、仲間と共に～」
(座談会) 依存症当事者(断酒会会員)

○大阪府後援依頼

様々な依存症とその支援について学ぶオープン講座

会 場 : 大阪国際交流センター3階 中会議室 銀杏
大阪市天王寺区上本町8-2-6

日 時 : 2019年3月23日(土) 9:00～受付 9:10～16:50
3月24日(日) 9:00～受付 9:10～16:55

第1日目

「行政の依存症相談」 講師/石神朋子 (大阪市こころの健康センター 主幹)
「司法を巡る問題とリカバリー支援」講師/荒木龍彦(近畿地方更生保護委員会委員長)
「12のステップについて」 講師/田島巳喜雄 (大阪マック 施設長)
「薬物依存症」 講師/麻生克郎 (垂水病院 副院長)

「発達障害の理解」 講師／市村健二（リカバリハウスいちご ソーシャルワーカー）

「嗜癖と摂食障害」 講師／永田利彦（なんば・ながたメンタルクリニック 院長）

第2日目

「家族支援」 講師／坂本満（新阿武山病院 医療福祉部 主幹）

「生活保護の基礎知識」 講師／谷口伊三美（東淀川福祉事務所 ケースワーカー）

「当事者の話」 GAメンバー

「ギャンブル依存症」 講師／滝口直子（大谷大学 教授）

「障害者問題の基礎知識」 講師／細井清和（障害者の自立と完全参加を目指す大阪連絡会議）

「依存症治療の変遷」 講師／辻本土郎（ひがし布施辻本クリニック 理事長）

修了式 特定非営利活動法人いちごの会 理事長 植松直道

<事業の成果>

○兵庫

地域ネットワークづくり「依存症の理解と関わり方を学ぶ」関係者研修会成果と課題

本研修は尼崎市において平成31年2月4日～2月22日のうち4日間行った。

本研修の目的はアルコールなどの依存症や関連問題の理解と啓発普及である。この目的はアクション関連問題は一機関だけの支援で完結するものではなく、当事者を含めた地域ネットワークの中で、当事者、家族への介入を行い、回復を支援する必要があるという考えに基づくものである。

企画段階では尼崎市疾病対策課、同子ども支援課、依存症専門治療機関、兵庫県断酒連合会、同家族会からの協力を得ることができ、本研修を幅広く告知することができた。結果として4日間の延べ参加者は217名（行政機関36名、医療機関32名、福祉機関59名、自助グループ80名、利用者4名、一般6名）で、様々な立場の支援者、当事者、家族が一つの研修に参加し、支援技術、医学的知識、活用できる社会資源、断酒会の歴史などを学ぶことをできたこと、そのものが成果であると感じている。

平成30年度より尼崎市においてアルコール関連問題支援ネットワーク構築に向けた取り組みとして、尼崎市疾病対策課とリカバリハウスいちご尼崎が事務局を担い、「あまがさき飲酒と健康を考える会」を設立し、年4回の架空事例検討、年1回の市民公開セミナーを開催した。今回の研修では飲酒と健康を考える会に参加したことがある参加者も多く、関心度の高さと、顔と顔が見える関係になってきていることが確認できた。

また、アンケートの結果では、当事者、家族の酒害体験談の反響が大きく、知識だけではなく、当事者の語りを聴くことで、病気の本質と回復への理解に対して参加者の気持ちが大きく動かされることも確認できた。こういったことから、参加者においては4日間の研修を通して、アルコール関連問題の裾野が広く、それぞれの立場の人間が一人に関わり、つなぐことで予防や回復がすすむということに対しての一定の理解が得られたように感じている。しかしながら、尼崎地域におけるアルコール関連問題支援ネットワークとして研修の成果

がかたちとして表れるのはこれから先であり、繰り返しこういった啓発普及活動を行う中で、地域の支援力を向上させていくことが当法人の今後の課題であると考えている。

○大阪

様々な依存症とその支援について学ぶオープン講座

多くの方々のご協力の元、アルコール依存だけではなく様々な依存症とその支援についてより広範な人達とともに学ぶ機会を提供することができました。研修の構成としては、薬物依存症、ギャンブル依存症、摂食障害、発達障害についてとりあげ、依存症治療の歴史についての講義と、回復の12のステップ、GAメンバーの当事者の話、回復を支える支援として、行政による相談と連携、司法の問題と回復支援、生活保護の基礎知識、家族支援、障害者問題の基礎知識の研修、を含んだものでした。

本講座では、知識と経験豊かな第一線で活躍する講師陣を招聘することができたことで、内容が豊かで、実践にも生かせる学びの多いものであったといえます。講師の方々に深く感謝申し上げたいと思います。

参加者からの評価も非常に高く、とても勉強になった、次年度も同じようなことを継続して欲しい、普段現場で起こるトラブルに動じないスタンスのやりとりが聞けた、等の感想や要望があがり、満足度の高い研修会ができました。

また、今後のテーマとしても多くの要望があがりました。依存症者の高齢化に伴う社会資源、ADHD、ACについて、依存にかかる大脳生理学的作用について、具体的な事例や対応方法について、依存症の回復支援の実践、ギャンブル依存症の方が病気を認めた時・自助グループにつながる時、発達障害とアディクションについて、クロスアディクションについて、ゲーム・スマホ依存について、パーソナリティ障害について、心理士の視点からの支援について、トラウマを抱えた依存症者への支援について、生きづらさを抱えた大人になる早い段階での対策について、今後の依存症に対して政府の見解について、人に対しての依存について等です。いずれも現場の疑問や悩みとなっている今日的なテーマであると考えます。今後は、これらの課題やテーマを取り上げながら、治療や支援に関わる人々の輪を広げていきたいと考えています。今年度は厚生労働省の依存症民間団体支援事業を活用できたことで有意義な研修企画をもつことができましたことを報告し、今後もこのような取り組みを継続し、依存症にかかる誤解や偏見を乗り越え、回復を支える社会づくりに寄与していきたいと考えます。